

連載
映画から
見えてくる
世界
第16回

映画にみる民族問題

『カルラのリスト』『サラエボの花』 木下昌明（映画評論家）



『サラエボの花』

その昔（一九八四年）、サラエボの冬季オリンピックをテレビで見ている、その華やかな都市の光景に驚いたことがある。それが十年もたたないうちに廃墟と化してしまっただが、その時そんなふうになるなど誰が信じられたろうか。

日本では、いま二本の映画が公開されている。一本はスイスのマルセル・シュンパツハ監督の『カルラのリスト』というドキュメント。これは旧ユーゴスラビア国際刑事法廷の女性検察官カルラ・ポンテがボスニア紛争（内戦）で多くの住民を迫害し虐殺した「戦争犯罪人」を裁判にかけするために奔走している姿を追いかける

たもの。もう一本は、ボスニアのサラエボ生まれのムスリム人女性監督ヤスマラ・ジェバニツチの『サラエボの花』。これは内戦から十余年後の平和がよみがえったサラエボに住む中年の女性エスマと、十二歳の娘サラの生き方をおして過去の「傷痕」に光をあてたもの。わたしはこの二本についてすでに『サンデー毎日』の十一月二十五号と十二月九日号にそれぞれ短い紹介批評を書いたが、ここでもう少し突っ込んで問題を追究してみたい。前者のテーマは、国家という枠を超えて「戦犯」を国際上の人道問題として対処することの困難についてであり、後者は、戦争で

狂わされた一庶民の側から戦後の人生を問うところにあるが、いずれもそこから浮かび上がってくるのは、民族問題であり、これを究明することなしには、映画のなかの「戦争」を何も明らかにしたことにはならないからである。

旧ユーゴスラビア社会主義連邦共和国は、チトーが率いる共産党バルチザンを母体にして一九四五年に誕生し、大統領にチトーがなった。この国は、六つの共和国に二つの自治州によつて構成されていて、クロアチア人、セルビア人、ムスリム人等々からなる多民族国家であった。それがチトーの死去とソ連を中心とする社会主義圏の崩壊にともなつて、これまでの支柱となつたインターナショナルな平和と平等を希求する世界観も同時に崩れ去つた。それに代わつて出てきたのが、共和国間の経済格差と結びついでた利害上の対立である。それがそれぞれの民族を柱

にしての独立と領土拡張の争いとなり、大きな紛争となつた。その一つがボスニア内戦である。

これについてわたしがまず思い起こすのは、映画ではなく、高木徹のドキュメント『戦争広告代理店―情報操作とボスニア紛争（講談社）』である。これによると、ムスリム人のボスニア政府が、内戦で優勢なセルビア側を打ち負かす手段として米国のPR企業に依頼して国際世論に訴えたこと―それによつてセルビア側の戦争行為を「民族浄化」や「強制収容所」などといった第二次大戦時のナチスドイツを連想するレッテル張りで悪いイメージを植えつけ、米国首脳を味方につけることに成功したと―この高木の本は、現代戦というものが、戦場での優劣同様に、遠く離れたところでのメディアの戦争でもあることをわたしに教えてくれた。国際社会ではイメージが現実をつくり出すわけだ。しかし、わたしが

ここで問題にしたいのは、チトーの時代、異民族同士、少しも違和感を抱かずに隣人として暮らしてきたのに、なぜ突然、積年の恨みを晴らすように憎しみ合い、殺し合うようになるのかということだ。それを内戦を描いた二、三の映画からみてみよう。

一本はポーロ・ドラシユコヴィッチ監督の『ブコバルに手紙は届かない』(94)。ブコバルとは、クロアチアの地方都市の名前。その街にクロアチア籍の女性とセルビア籍の男性が恋愛し、家を建てて暮らしはじめた。テレビにはベルリンの壁の崩壊が映っていて、かれらもそれを喜ぶ。しかし、無縁なはずの壁の崩壊が波及してきて、突然クロアチア民族運動が発生し、セルビア人の追い出しがはじまる。夫はユーゴ連邦軍に召集され、急造のクロアチア軍と戦う破目になり、妻は妊娠したままさまよい無法な男たちにレイプされる。ラストは、命からがらの二人が別々のバ

スに乗って右と左に別れていく。この映画は、当のブコバルの戦場跡で撮影され、見るも無残な廃墟の街の全景をとらえている。平和な街があれよあれよというまに恐怖と憎悪の街に変貌していくのには暗たんとさせられる。

ドラゴエヴィッチ監督の『ボスニア』(96)は、幼いころから親友のセルビア人とムスリム人がいた。かれらは社会主義時代、国家的事業としてのトンネル建設の式典にも参加した。それが事業半ばにして内戦となつて、二人は敵対し合う軍隊に召集される。そして皮肉にも未完成のトンネルの内と外に分かれて対峙する。ラスト、ムスリム人がセルビア人の前で死んでいくが、そのとき「久しぶりだったなあ」と言葉をかける。

この二本は、どんなに仲のよい夫婦や友達でも、いったん民族紛争がはじまると、夫婦が夫婦でなく友達が友達でなく、互いに引きさかれて

いく——その無残が描かれていた。

もう一本、エミール・クストリツァ監督の『アンダーグラウンド』(95)は、ドイツ軍との戦争時代からずっと戦争がつづいていると騙し騙されて地下生活を送る人々を描いて、ユーゴの戦後史をカルカチユアライズしたものだ。ラストは川に浮かぶ小島で人々が歌い踊っていると、いつの間にか島の一部が割れて流されていくシーン。そこには一つの国家がいくつにも分割して漂流していくユーゴのいまが風刺されていた。

この種の映画は他にも多くつくられてはいるが、いずれもが平和と平等を希求する世界観を失ったとき、人々はどのように翻弄されていくか、その未来のない悲惨な諸相を浮かび上がらせていた。そこで人々は自らの寄りどころを求めて歴史をさかのぼり、古い「民族」共同体という観念にしがみつき、アイデンティティをそこにみいだそうとする。しかし、そ

れは戦後の社会主義化のなかで一度は否定してきたものである。それなのに強引にも引き返そうとする。そのとき、人々は未来への理想を失う。悲劇はそこから生まれる。そのことを旧ユーゴの崩壊が明らかにしている。その結果、人口四三五万人のボスニアで、二〇万人の死者と二〇〇万人もの難民や避難民が生み出された。

いま公開中の映画は、この民族間題のマイナス面を考えさせ、それを克服するための素材を提供してくれる。『カルラのリスト』では、ボスニアのスレブニツァという街で、ムスリム系住民がセルビア勢力によって八〇〇〇人も一どきに虐殺された事件に焦点をあてている。その政治指導者カラジッチと軍事指導者ムラジッチを「戦犯」としてカルラは探し求め、小型飛行機でセルビアやクロアチアへと飛び、各国の首脳とあの手この手でわたり合っている。このドキュメンタリーは、彼女の行動に密

着して、国連の協力をえられないまま独力で活動している姿をそこにとらえている。これまで世界は、東京裁判やベルリン裁判のように戦勝国が敗戦国の指導者を戦犯として裁いてきた。しかし、ここには戦勝国も敗戦国もない。国家間のレベルを超えて人類に対する犯罪として裁くことで、狭量な民族主義の精神を弾劾する道が切り開かれようとするさまをみることができるとも、画面いっばいに広がる墓標の列にはあぜんとなる。

また『サラエボの花』には、街に戦争の陰はなく、シヨーウインドーにはさまざまな商品が飾られ、高速道路が走り、すっかり昔の華やかさを取り戻した観がある。しかし、そんななかで内戦の後遺症に苦しんでいる女性に焦点をあて、華やかさの陰に隠れた戦争の実態を掘り起こしている。それは二万人もの「集団レイプ」の問題である。パンフレット

で監督インタビューによって、それは単に男たちが性の欲望をみたすためではなく、「セックスが戦争戦略の一つ」として用いられたと――つまり、多民族の女を犯すことで、その民族の血を汚し、屈辱を与える手段として意識的に用いられたということがわかる。ここにも民族主義の歪んだ姿がみられる。そこで映画は、このレイプされた女性エスマから生まれた娘サラとの葛藤をとおして、民族の壁をこえた道をさぐる。はじめサラは、自分の父をムスリムの「殉教者」と誇りにしていた。ところが、母の告白によって自分がセルビア人の何者かもしれない男たちによって生を受けたと知ったときの絶望感ばかりしれない。しかし、そこから本当の生き方がはじまるし、はじめなければならぬことをこの映画は見事に表現していた。

エスマは、これまでレイプされた女性たちが集うセラピーセンターで

かたくなに口を閉ざしていたが、はじめて赤ん坊を抱いたときの「こんなに美しいものがこの世にあることを忘れていた」と涙ながらに明かす。そこにあるのは、どんな敵も民族の違いもない、不幸な状況下で身ごもらされたが、生まれてきたのはわが子であり、同じ人間なのだという発見である。

サラもまた、偏狭な民族観にとらわれていたが、父がだれであろうと、自分を娘として人間として育ててくれたことを（母に感謝するであろうように）監督は描いている。そのことは、サラが母に向かって、バスの窓に手をあてるシーンによく表われている。ここからみえてくるのは民族にとらわれない人間への限りない肯定と賛歌である。

この二本の映画は、いずれもこれまでのユーゴ映画とはひと味違って人々に新しい未来を予感させる仕上がりになっている。